

## 八代妙見の靈符

西田耕三

不慮の死をとげた細川宗孝の跡を継いだ弟の細川重賢(1720-1785)は、延享4年(1747)から天明5年(1785)まで、40年近く熊本藩第8代藩主として、さまざまな改革を行ない、中興の祖といわれている。政治家としての功績だけでなく、28歳まで部屋住みの自由な身であったということもあろうか、多方面にわたる趣味によって熊本藩文事を中心でもあった。

重賢と他大名旗本たちとの交流は、永青文庫蔵『重賢公御代御代筆扣』によって直接知ることができる。この『御代筆扣』は、宝暦8年(1758)から天明3年(1783)までの間の重賢の書簡約600通を後に編集したもので、雑記というには些か憚りあるものの、雑記的で面白い内容を含む。書簡の話題はほとんどが広い意味での文事(俳諧、漢詩、謡や舞、蹴躑、本草等)に関わるものである。今回はその中から、酒井山城守(松山公子)あての書簡を紹介してみよう。

酒井山城守忠起は、出羽松山藩(山形県飽海郡松山町)の藩主酒井忠休の養子であった。松山公子は松山藩の公子という意味である。『御代筆扣』は11通の酒井山城守あての書簡を収めている。宝暦8年(1758年。重賢39才、忠起24才)1通、同9年6通、同10年2通で、内容は、忠起から鳥禽を送られたことに対する礼、小鼓借用の願いの承諾、俳諧や漢詩の会に関する消息、馬術の件などである。重賢と忠起の間に雅交があったことは他の文芸資料にもみえる。忠起は15才年長の重賢を文事の先輩とみて慕っていたのであろう。ここで書きぬいておきたいのは、最後となる明和4年(1767年。重賢48才、忠起33才)の2通である。

○明和4年3月3日

御状拝見致し候。弥々御障り無く珍重の御事に候。旧年三月以来、脚気浮腫にて御勝れ成られず候処、此節は御快方に候由賀し奉り候。然れば幣邑の銅板妙見靈符御所望の由、委曲御紙表の趣承知致し候。則ち八代へ申し遣わし候間、追って是より御意を得べく候。恐惶謹言。

尚以って、妙見尊像も御所望に御坐候由、承知致し候。有無の儀、臆と覚え申さず候間、吟味致し是又追

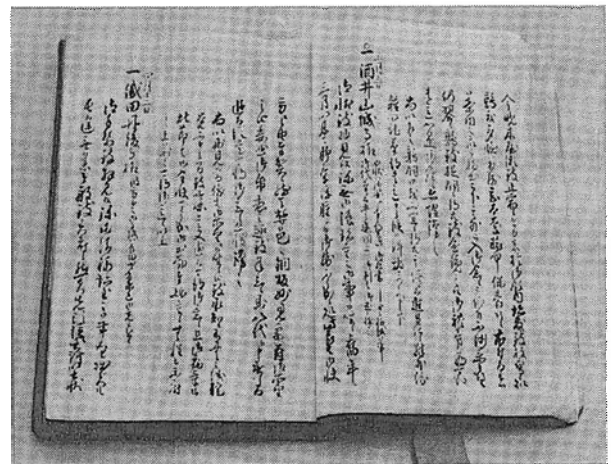
て御意を得べく候。且つ、御病氣も此節は御全快成らるべく、御出勤珍重に奉り候。程無く参府の上、万々御意を得べく候。以上。

○明和4年5月朔日

手紙を以って啓達致し候。弥々御障り無く、御病氣も段々御全快成らるべく、珍重の御事に御坐候。然れば先達て仰せを蒙り候妙見靈符並びに尊像も出で候由にて、此節国許より差し越し候に付き、進呈致し候。銅板靈符と仰せ下され候に付き、吟味致させ候処、已前は銅板にて候得共、戦国の時分紛失、其後加藤右馬允銅板の写し木板寄附の由申し伝え、今、右の木板を以て相用うる由に候。書余面謁の節を期し候。不悉。

明和3年3月以来、脚気浮腫に悩んでいた酒井忠起は、おそらくその平愈を願ってであろう、明和4年八代妙見の銅板靈符と妙見像を国許にいた重賢に求めてきた。重賢は八代へ指示を出し、間もなく江戸へ向かった(3月5日に熊本を出発して、4月9日に江戸着)。そして、やがて国許から送ってきた靈符と尊像を忠起に送った。ただ、銅板の靈符は戦国の時に紛失し、現在はその写しを木板にしたものを用いているので、それを送るといふ。銅板の写しを木板にした「加藤右馬允」とは、おそらく八代城代を勤めた加藤正方(1580-1648)のことであろう。

八代妙見の木板靈符と妙見像を得た酒井忠起は十分



『重賢公御代筆扣』明和4年の条

に満足したであろうが、一月あまり後の6月9日、この世を去った（『寛政重修諸家譜』巻66による）。松山藩では、同年7月3日、忠休の実子忠崇が嫡子となり、天明7年（1787）、忠休の跡を継ぐことになる。

八代妙見の霊符のことは、宝永5年（1708）に出版された『鎮宅霊符縁起集説』に記されている。この本は、大正4年に三田村鳶魚によって『信仰叢書』（国書刊行会）に収録され、さらに平成5年、ゆまに書房から再刊されている。それによると、北辰尊星（北極星、妙見菩薩と習合）の霊符は、漢の孝文帝が劉進平という人から伝授されて世に広まり、日本へは、推古期に百済の聖明王の子琳聖太子が伝えたという。琳聖太子の渡来の地が肥後八代の白木山神宮寺だったのである。

さらにこの本は、霊符の彫版の最初は天平12年だが、その版はもうないこと、現在の版は南朝正平6年（1351）に懷良親王が神宮寺に納めたものであること、妙見は玄武（亀蛇合体）であることを記し、神宮寺の歴史、霊符の霊威・秘法等に及ぶ。黄檗僧妙幢浄慧という人の『儒釈雜記』（写本、宝永4年序）巻45に抜粋引用されているし、『信仰叢書』の三田村鳶魚「緒言」にも「東京に現存せる亀塚庚申塚は元禄享保間のもの最も多く、其の前後のもの甚だ尠きは、信仰展転期を證せん便あらんか」とあるから、一時期大いに流行した信仰であろう。亀蛇はいうまでもなく八代妙見祭のガメである。

（にしだ こうぞう 文学部教授 国文学）

## 重要文化財「阿蘇家文書」をホームページで公開中！

「阿蘇家文書」は阿蘇神社宮司阿蘇惟友氏旧蔵の古文書(1,047点)で、この内、中世文書34巻(304通)写本36冊は昭和62年に国の重要文化財に指定されました。

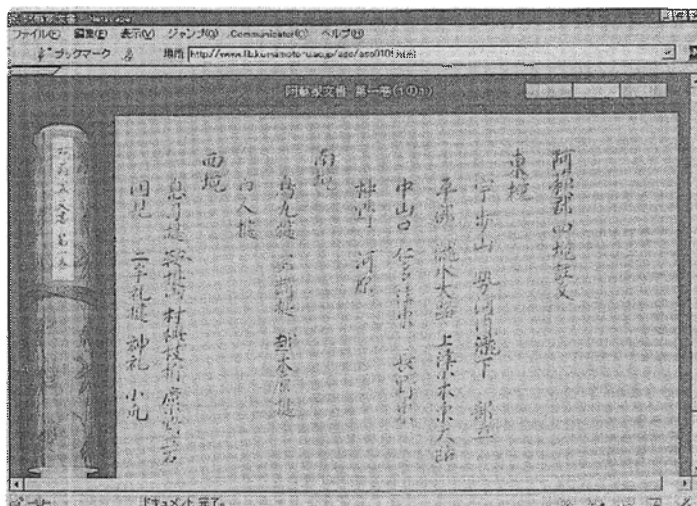
これまで一般利用者の目にほとんど触れることのなかったこの貴重な資料をデジタル画像化し、インターネットを介して学内外からの閲覧が可能になりました。

画像データは、附属図書館のホームページから、[図](#)

書館利用案内のメニューを選び、[コレクション](#)のページの中から[阿蘇家文書](#)をクリックし、解説文の冒頭にある[阿蘇家文書（画像）](#)ボタンをクリックすることでご覧いただけます。

平成11年1月現在、第2巻までの公開ですが、今後ともデータの蓄積とサービス内容の充実を図っていきますので、どうぞお楽しみに。

（情報サービス課 電子サービス係）



附属図書館ホームページ (<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp>)